

明治・九谷焼の名窯・作家

～ 日本の伝統的美意識や技法を引き継いだやきもの ～

織田甚三商店 [1885 - 1923年]

石川県・加賀（寺井）の名家で、遠縁は織田信長の一族です。明治維新以前は土地の代官所の重責でしたが、初代・織田甚三（1846-1915年）は早くから九谷焼の陶器商人を志し、ついに寺井でも規模の大きな陶器商人の一人になりました。小松の松山新助が1870年頃から作り始めた「庄三風」の九谷焼を綿谷平兵衛、筒井彦次、酢屋久平、綿野吉二らとともに輸出に力を入れました。1885年、織田甚三商店を開き、横浜にも支店を設け、九谷焼の輸出が盛んな機運に乗って業績を上げました。特に、横浜支店では欧米からの極薄でしかも丈夫な日用品輸出への需要の強さを感じ取り、同じ陶器商人の綿野安太郎らとともに、その販売に注力しました。それが、“卵殻手（らんかくで エッグシェル）”と呼ばれた極薄の磁器でした。しかしながら、1923年、関東大震災によって横浜支店が大打撃を受けて、神戸に転進して再起を図る努力を続けましたが、これまでの勢いが見られなくなりました。

1893年のシカゴ万博や1904年のセントルイス万博での受賞歴があります。

清水清閑 [1835 - 1921年]

明治初期から活躍した明治九谷の名工の一人です。1876年、早くも金沢で九谷焼の店舗を開く一方で、藤岡岩花堂（明治13年に開窯）での作品制作に関与したといわれます。清水清閑は中国風の人物図や山水図を細密に描いた、高さ数十センチの輸出用の花瓶、壺を制作することもありましたが、和風の文様を施した湯呑、急須などの小ぶりの器も国内向けに制作しました。

いずれも微細な絵付の作品でした。1877年の内国勸業展覧会において優れた陶画工に贈られる褒状を受けています。